



2014年7月9日放送

頻用処方解説 柴胡清肝湯

大分大学医学部附属病院 漢方外来 西田 欣広

主な効能

虚弱者、癩の強い傾向にある小児腺病体質者で、西洋病名としては慢性胃腸炎、貧血、頸部リンパ腺炎、肺門リンパ腺炎、慢性扁桃腺炎、扁桃腺肥大、神経症、湿疹に適応があります。

出典・処方名の由来

柴胡清肝湯は一貫堂経験方の1つです。この一貫堂の柴胡清肝湯は、森道伯（1867-1931）が荊芥連翹湯とともに温清飲を基本として考案したものとされ、小児の腺病質を改善します。

もともと柴胡清肝湯は柴胡を主薬とし、肝の熱を清ますという意味で名づけられています。この方名あるいは類似方名は中国明代16世紀以降に10種類近くの記載の記録が残っています。しかし、現在の日本で用いられている柴胡清肝湯は、これらの処方を基礎にして、日本独自に創薬されたものです。

生薬構成の漢方的解説（薬能）

本方は温清飲（補血活血作用を持つ四物湯＋清熱瀉火作用を持つ黄連解毒湯）に柴胡、薄荷、桔梗、連翹、牛蒡子、栝楼根、甘草を加えた構成です。温清飲は長引いた熱をさまし、血を潤し、肝臓の働きをよくします。桔梗は頭目、咽喉、胞膈の滞熱を清くし、牛蒡子は肺を潤し、熱を解し、咽喉を利し、皮膚発疹の毒を解します。栝楼根は津液を生じ、熱を涼し、燥を潤し、腫れを消し、膿を排する働きがあるとされます。

古医書における記載（江戸期以降）

原方は『外科枢要』（1571）の癰癤門にあって、その主治にあるごとく、「肝、胆、咽喉、頸部、耳に連絡する三焦経の風熱を治す」とあります。その経絡上に現れた風熱すなわち炎症を治します。

その他多くの論説がありますので、2～3 紹介します。香月牛山（1656-1740）の『牛山方考』には、「肝胆の経の腫物、或は癰癤気腫の類、未だ癒えざる。或は耳項胸乳胸肋の腫物、或は耳内痒く、或は停耳、或は便毒、囊瘍、或は下疳瘡の類、以上諸証に用いる」とあります。

長沢道寿（?-1637）らの『医方口訣集』には、「肝胆三焦の風熱怒火、或は往来寒熱、或は頭に瘡毒を発する等の症を治す」とあります。また、浅田宗伯（1815-1894）の『勿誤藥室方函口訣』には、「この方は口舌唇の病に効あり。畢竟する処、清熱和血の剤にして、上部に尤も効あるものと知るべし」とあり、さらに百々漢陰（1774-1839）・百々鳩窓（?-1878）の『梧竹楼方函口訣』には、「諸火類に婦人平生肝火の盛んに月水不調、加味逍遙散の症にて今一等肝火の強き者に宜し」とあります。

現代における使い方

一般に痩せ型または筋肉質で、皮膚の色は浅黒くあるいは青白いものもあるが、汚くくすんでいるものが多い。腹診上、両腹直筋の緊張があり、肝経に沿って過敏帯を認め、腹診するとくすぐったがるもの、このような患者に使うと良いとされます。

EBM

2 歳から 15 歳のアトピー性皮膚炎に柴胡清肝湯を投与した 1 件の症例集積研究があります（伊藤ら, 1992）。この研究では柴胡清肝湯は投与開始後 1 週間で掻痒感の軽減を認め、皮膚症状の評価も 2 週間後より有意に改善されています。しかし、本研究は男児 15 例、女児 10 例の計 25 例の少数例での検討であるため、今後の症例の蓄積が望まれます。

処方適応のポイント（口訣）

望診で皮膚が乾燥気味で浅黒く、感受性が強い虚弱な小児が良い適応です。切診で頸部や顎下にリンパ節の腫大を認め、腹診で腹直筋の緊張とくすぐったがりを認めます。一般に、本方は上焦の熱証を治し、竜胆瀉肝湯は下焦の熱証を治すとされています。本証の子どもは成長すると荊芥連翹湯証を呈する例が多いようです。

類方鑑別

一つ目は小柴胡湯で、胸脇苦満が著明な場合に用います。本方は腹直筋の緊張が主体です。二つ目は小建中湯で、身体が虚弱で腹壁の筋肉が薄く腹直筋の緊張があり、腹が痛む時に用います。三つ目は柴胡桂枝湯で、腹直筋の緊張が強かつ胸脇苦満がありしばしば腹痛を訴える場合に用います。これらの鑑別ができればよいと思います。

自験例

13歳の中学1年生の男子。生来神経質で怒りっぽい性格です。小学生の頃からアトピー性皮膚炎で、近くの皮膚科で治療するも改善せず当院を受診しました。体格は筋肉質。顔色は浅黒く頸部、上肢にかけアトピー性皮膚炎の皮疹を認め、掻痒のためかなり掻きまわっています。脈は緊。腹直筋の緊張を認めました。腹部を触られるのは苦手だといいます。この症例に柴胡清肝湯を1日3包で処方しました。1ヵ月後に皮疹は少し赤みが薄くなりました。3ヵ月後には、皮疹は残るも掻痒感はほとんどないとの経過です。同処方を継続し、6ヵ月後には、皮疹はほとんどしみ程度に症状は改善し、柴胡清肝湯が著効した症例でした。